

満洲における日中スポーツ交流（1906-1932）： すれちがう「親善」

高 嶋 航

はじめに

建国当初から、満洲国は自らを表象する媒体としてスポーツを重視した。早くも建国の翌月には、建国記念連合大運動会（以下、建国運動会）の開催とロサンゼルスオリンピックへの参加の方針が決定されている¹。あわただしく建国され、国家制度を一から構築していかなければならない草創期に、なぜスポーツ事業が優先的に実施されねばならなかったのか。

近代国家は「国際」的な承認を得てはじめて「国家」として「存在」することになるが、満洲国は最後まで一部の「国際」社会、あるいは特定の「国際」社会からしか承認を得ることができなかった。したがって、満洲国にとって、その存在を他者に承認させることは終始重要な課題であり続けた。王道楽土、五族協和は自己の存在を正当化するための理念であったが、それをいかに表象すればよいのか²。

スポーツには内向きの作用（社会集団内の団結を促進）と外向きの作用（社会集団間の親善を促進）がある。満洲国が建国直後に実施したスポーツ事業はまさにこの二つの作用、すなわち、建国運動会は満洲国内の諸民族の団結（「五族協和」が謳われるのは第2回のときで、第1回には「民族融和」がスローガンだった³）を、オリンピッ

¹ 金誠「リットン調査団と満洲国建国記念連合大運動会：関東軍による宣伝・宣撫工作としてのスポーツ」『札幌大学総合論叢』44号、2017年10月。オリンピックについては1932年4月上旬に参加の方針が決定され、5月21日にロサンゼルスオリンピック組織委員会に満洲国の参加承認を求める電報が発せられた（満洲帝国政府編『満洲建国十年史』原書房、1969年、892-893頁）。

² 満洲国の表象については、『満洲グラフ』などの雑誌、映画、ポスターなどに関する研究があるが、スポーツが主題となることはなく、また言及されることもない。

³ 金誠「リットン調査団と満洲国建国記念連合大運動会」。

クへの参加は満洲国を国際社会のメンバーとして認めさせることを、それぞれ意図していた。なかでも建国運動会は民族融和に加えて、リットン調査団対策という性格をも有していたので、一つのイベントで二つの作用を兼ね備えていたと行うことができよう。建国運動会は満洲国の内外にその存在を知らしめる宣伝の媒体であった。関東軍参謀部宣伝課と資政局弘法処（満洲国の宣伝機関）がその主たる推進者であったことは、建国運動会のこのような性格をより鮮明に示している。言うまでもなく、建国運動会もオリンピックも所期の成果を挙げるができなかった。リットン調査団の調査員は建国運動会を目にすることがなかった⁴。その報告書では「現在の政権は純真且つ自発的な独立運動によりて出現したものと思ふべきを得ず」（第6章第1節）と断定されたが、純真と自発性こそ建国運動会で日満（「満」は中国人）の子供が協力しあうという形で示されるはずのものであった。オリンピックのほうは、満洲国の参加が認められなかったばかりか、その二人の候補者（于希渭と劉長春）のうち、劉が初の中国代表として参加するという結果に終わった。劉が大連出身だったことを考えれば、満洲国の参加のみならず、満洲国の存在そのものが否認されたに等しい。こうした挫折にも関わらず、満洲国のスポーツ関係者は、東洋体育協会加盟（1934年）、国際陸上競技連盟加盟（1939年）、日満華交驩競技大会開催（1939年）、第2回東亜競技大会開催（1942年）と、「国際」スポーツ界との関わりを摸索し続けた⁵。

以上の視点から満洲国のスポーツを検討することは今後の課題とし、本稿ではスポーツが団結や親善の媒体となるという前提に立ち返り、このような前提がいつどのようにして形成されたかを考えてみたい。というのも、もし満洲国の誕生が10年前、つまり満洲の日本人の間にも中国人の間にもスポーツがあまり普及していない時期だったならば、スポーツが如上の役割を果たしたとは考えられないからである。具体的には、1928年を転換点とし、それ以前を「内向きの時代」、それ以後を「外向きの時代」と規定し、それぞれの時代における日中間のスポーツを通じた交渉の諸相を第1章、第2章で跡づける。さらに第2章では、外向きの時代を特徴づけた「親善」の言説に着目し、この言説の政治的背景を考察する。第3章では、「親善」が破綻し、スポーツを

⁴ 金誠「リットン調査団と満洲国建国記念連合大運動会」。

⁵ 満洲帝国政府編『満洲建国十年史』892-907頁。

通じた日本人と中国人の関係がふたたび内向きに転じたことを示す。

最後に先行研究に触れておこう。満洲のスポーツに関する研究はわずかしかないが、いずれも満洲国を直接の対象としており、満洲国建国以前のスポーツについての研究はない⁶。筆者自身が岡部平太を論じたさい、岡部の視点から満洲のスポーツをかいま見たが、その全容はほとんどわからないままであった⁷。満洲国建国以前のスポーツを概観できるような資料はなく、年鑑や野球・ラグビーに関する部史・資料集からその一端を窺うことができるだけで⁸、結局は新聞を一枚一枚繰っていく以外に方法がない。本稿で用いる主たる資料は『満洲日日新聞／満洲日報』（時期により名称が変わる。以下『満日』）であるが、これは他の日本語新聞や中国語新聞が重要ではないことを意味するのではなく、『満日』を見るだけで精一杯であったということである。今後、探索の範囲を広げて、本稿の議論を（とりわけ中国側の視点から）相対化する必要がある。

本論に入る前に、用語の説明をしておく。本稿で「満洲」と言う場合、具体的には関東州と満鉄附属地を指す。のち満洲国となる領域のうち、関東州と満鉄附属地以外の中国人が支配する地域を指すときには「東三省」を使う（満洲、東三省とも本来「」を附すべき言葉であるが、繁雑になるため、以下「」を外す）。日中間のスポーツ交流といっても、満洲内の日本人と中国人の間と、満洲の日本人と東三省の中国人の間とは、位相や意義が異なることは言うまでもない。具体的には前者が第1章、後者が第2章の主題となるだろう。

⁶ 笹島恒輔「旧満洲国の体育とスポーツ」『体育研究所紀要』5巻1号、1965年；入江克己「日本近代における植民地体育政策の研究（第1-6報）」『鳥取大学教育学部研究報告』教育科学、35巻2号-38巻2号、1993-1997年；志々田文明『武道の教育力：満洲国・建国大学における武道教育』日本図書センター、2005年；王妍「偽満体育研究」修士論文、蘇州大学、2007年。

⁷ 拙稿「戦争・国家・スポーツ：岡部平太の「転向」を通して」『史林』93巻1号、2010年1月。

⁸ 宮崎愿一、安藤忍、立上武三編『大連実業野球団二十年史』安藤商店、1932年；小林完一編『満洲倶楽部野球史』満鉄会、1969年；鞍中ラグビー部OB会編『鞍山中学ラグビー部史』鞍中ラグビー部OB会、1987年；西脇良朋編『満洲、関東州、華北中等学校野球史』西脇良朋、1999年；秦源治『わが国球界をリードした大連野球界』20世紀大連会議、2009年など。

第1章 内向きの時代（1906-1927）

第1節 1910年代

1910年代、満洲の日本人は野球、テニス、ボート、スケート、陸上競技、水泳、それに武道などのスポーツを楽しんだが、その担い手は学校や会社の関係者であった。しかし、陸上競技と水泳を除くと、もっぱら日本人同士でおこなわれ、中国人とはほとんど関係を持たなかった（ボール拾いやグラウンドの整備に中国人を雇うことはあった⁹⁾）。最大の要因は、当時のスポーツ界の主力だった中国人学生の不在であろう。満洲には1910年代末まで中国人向けの中高等教育機関がほとんどなかった。中等教育機関では、南満中学堂が1917年に設立されたのが最も早く、旅順中学に「支那人学級」ができたのは1921年、そして中国人のための中学校、旅順二中が設立されたのは1924年であった。また、高等教育機関では、南満医学堂（1911年設立）と南満工業学校（1912年設立）が当初から中国人を受け入れていたが人数は少なく、旅順工科学堂が中国人学生を募集するのは1918年以降である。もちろん、満洲の周囲には東三省側の中高等教育機関が少なからず存在したが、満洲の日本人スポーツ界との交流はなかった。

ただし、初等教育では小学校の生徒と公学堂〔中国人向け初等教育機関〕の生徒と一緒に運動会や水泳をするという場面が見られた¹⁰⁾。たとえば1910年5月には旅順で関東州各学校大運動会が開かれ、関東州の小学校、公学堂の生徒2,500名が参加した¹¹⁾。満鉄附属地でも、1915年9月に奉天で沿線小学十八校六公学堂連合大運動会が開かれ、生徒2,000名が参加した¹²⁾。また、毎年夏期には大連近辺の海岸で、関東州及び満鉄附属地の各小学校、公学堂の生徒による集団水泳が実施されていた（1915年に満鉄附属地からやってきた生徒687名のうち、71名が中国人であった¹³⁾）。

日本人と中国人の青年同士が競技した数少ない例外として、満鉄運動会のマラソン

⁹⁾ 『満洲が生んだ女流運動家』『満日』1931年6月21日。

¹⁰⁾ 小学校と公学堂はそれぞれ中国人、日本人を排除してはならず、小学校に中国人生徒がいたり、公学堂に日本人生徒がいたりすることも珍しくなかった。

¹¹⁾ 『満日』1910年4月27日、5月9日。

¹²⁾ 『満日』1915年9月21、27-29日。

¹³⁾ 『満日』1915年7月22日。

を挙げておこう。満鉄運動会とは、1910年9月に大連で設立された満鉄社員の体育組織「満鉄運動会」（以下、組織の場合は「」をつける）が毎年開いていた運動会である。この運動会の目玉行事の一つがマラソン（といっても3,000メートル）である。第1回（このときは1マイル）と第2回のときに中国人が参加したかどうかはわからない。第3回以降、出場者が増えたために予選が導入されるが、第3回の予選、本戦で優勝したのは中国人、孫克宏であった。孫は川崎造船所の須田鋼鑑の車夫で、ゴールで待ち構えていた須田は「喜び極つて孫を抱き上げ背を撫した」という¹⁴。第4回には多数の中国人が参加し、20位までを中国人が占めた。中国人の圧倒的優位は日本人にとって「実に癪」なことであった¹⁵。そのためか、第6回では外国人と日本人を別々に走らせている¹⁶。1916年の第7回になってようやく日本人が優勝し、それ以後は中国人の活躍は見られなくなる¹⁷。この事例は、親善という点から見て、スポーツが両刃の剣であったことをよく示している。

日本人は満洲の中国人を支配し、教育する立場にあった。1923年に西岡子公学堂で開かれた第1回運動会について、『満日』は次のように報道した。

国民性の短所として巧妙に出来ない協同動作が比較的良く行つた事は、特に教職員が訓練に骨を折つた跡歴然として見られた。個人主義な支那人の面目の露はに見えて可笑かつたのは、個人競技の中でも徒歩競争の如き、一二三番が決勝戦に入れば四五番に続いて居た者もグツタリとして走る事を止める、まして遠く後れたものは初めから歩いて来ると言ふ有様で潑刺たる元氣は見られなかつたと¹⁸。

このような中国人観は当時の日本人には珍しいものではなかったし、「一盤散沙（バラバラの砂）」という言葉が示すように、一部の中国人にも共有されていた¹⁹。それは分裂する中国のイメージと重ねあわせられ、中国人が国民国家をつくる能力のない民族であ

¹⁴ 『満日』1912年4月26、30日。

¹⁵ 『満日』1913年5月5日；「BM戦の昔を語る」『満日』1936年6月2日。

¹⁶ 『満日』1915年5月3日。

¹⁷ 『満日』1916年4月23日、5月8日。1919年（8,000メートル）と1920年（1,500メートル）には日本人しか参加できなかった（『満日』1919年4月18日、1920年4月10日）。

¹⁸ 『満日』1923年10月12日。

¹⁹ 拙稿「『東亜病夫』と近代中国（1896-1949）」村上衛編『近現代中国における社会経済制度の再編』京都大学人文科学研究所、2016年。

ることを日本人に再確認させたのである。日本人は国民性が優れているからこそ支配民族となるのであり、また支配民族だからこそ国民性が優れているのである。日本人と中国人の力関係の一時的な逸脱は許容されるが（須田と孫の美談のように）、それが常態化するのには好ましくない。中国人の優位が常態化しそうな場合には、なんらかの理論づけ（言い訳）をして、両者が直接対決するのを回避しなければならなかったのである。

第2節 1920年代

1920年代になると、日本人側でも中国人側でもスポーツが飛躍的に発展し、相互の関係も深まる。

日本人側では1921年に岡部平太らが中心となって全満競技連合（1924年に満洲体育協会と改称）が結成され、大連の「満鉄運動会」とともに関東州内はもちろん、全満規模で競技会を整備していく。満鉄附属地でも各地に体育協会が設立された（これら体育協会は満洲体育協会の支部ではなく独自に運営されていた）。中高等教育も大幅に拡大し、関東州では1918年に大連中学、1924年に大連二中が設立され、満鉄附属地では1919年に奉天中学、1920年に長春商業、1923年に鞍山中学と撫順中学、1925年に安東中学が設立された。高等教育機関は、旅順に旅順工科大学（1922年に旅順工科学堂より昇格）、奉天に満洲医科大学（1922年に南満医学堂より昇格、ただし南満医学堂は1928年まで存続）、満洲教育専門学校（1924年設立）、南満洲工業専門学校（1922年設立）があり、それぞれ対抗競技を実施しただけでなく、各種競技の全満大会を主催した。さらに旅順運動場（1926年）、大連運動場（1928年）、奉天国際運動場（1930年）など全満各地で競技場やプールなどスポーツ関係のインフラが整備された。

中国人側では1920年に『泰東日報』主筆の傅立魚らの発起で大連中華青年会が設立された。同会には体育部、武術部などが置かれ、中国人体育の振興を図った。1922年5月に同会が挙行した第1回春季運動会には、大連の11団体、580人が参加した。翌年8月には第1回水泳大会も開かれている²⁰。後年には、陸上競技の劉長春、于希渭、水泳の史興隆らがこれらの大会で活躍した。中華青年会が開催する各種競技会は中国

²⁰『満日』1922年5月12日、8月23日。

人を対象としていたが、日本人側も協力を惜しまず、第1回春季運動会で満鉄は500円を寄附、満洲日日新聞社は金賞牌を寄贈している²¹。また第1回水泳大会には「満鉄運動会」水泳部の後援があり、第2回水泳大会では、岡部、山本芳松、和田次衛（極東大会水泳競技日本代表選手）をはじめ日本人関係者が役員に名を連ねた²²。ただし、日本人と中国人の関係はつねに良好だったわけではない。たとえば、1925年11月に中華青年会が主催した全満足球大会は、排日示威運動会だと噂された²³。

1920年代には日本人側、中国人側の双方でスポーツが大いに発展したが、その様態は異なっていた。たとえば、1921年に旅順工科学堂と南満医学堂の対抗競技会（蹴球、相撲、庭球）が開催されるが、蹴球の選手はみな中国人であった²⁴。このように、日本人と中国人の関係のあり方は競技種目によって違いが見られる。

野球は日本人に最も人気のあるスポーツであったが、満洲の中国人の間にはほとんど広まらなかった（北京、天津の一部の中国人学校では盛んだった）。それでも何度か中国人が野球を手掛けたことがある。1918年から翌年にかけて銭鈔の店員や取引所の仲買人たちが相次いで野球チームを結成した。日本人はこれを積極的に支援し、日本人チームとの対戦も実現した²⁵。そもそも大連銭鈔信託株式会社の支配人神崎常一は大連実業野球団の熱心な後援者であったし、大連の銭鈔関係者は日中合同の運動会を開催しているから、野球を通じた日本人側との交流に前向きだったのだろう²⁶。しかし、野球チームはほどなくして消滅した。1924年にふたたび野球熱が高まると、日本人側は「日支親善」のチャンスととらえ、「中国人に野球趣味の鼓吹と普及」を図ろうとしたが、これまた一時的なブームに終わった²⁷。

中国人に人気があったのはサッカーである。管見では1920年10月に中国人と外国人が試合をしたのが大連における中国人サッカーの最も早い事例である²⁸。サッカー、

²¹ 『満日』1923年5月12日。

²² 『満日』1923年8月23日、1924年9月7日。

²³ 『満日』1925年11月13日。1925年は五・三〇事件の影響で排日運動が高まった年である。

²⁴ 『満日』1921年6月11日。

²⁵ 『満日』1918年3月30日、7月25日、1919年6月12、15日。

²⁶ 『満日』1919年5月3日、1920年12月12日。

²⁷ 『満日』1918年7月25日、1919年6月12、13、15日、1924年3月26日。

²⁸ 『満日』1920年10月23日。奉天では1918年ころにサッカーが始まり、1921年に奉天YMCA

バスケットボール、バレーボールなど、新スポーツの普及に力を入れていた全滿競技連合は1922年に全滿蹴球大会を開催した。参加したのは外人団、大連中学、南滿工業、滿洲医科大学、旅順工科大学、大連中華青年会、旅順師範学堂、南滿中学堂で、少なくとも大連中華青年会以下3チームは中国人チームだった。優勝したのは外人団で、準優勝は大連中学だった²⁹。しかし、ほどなくして中国人の競技水準が向上し、日本人は太刀打ちできなくなる。

同じころ、日本人の間にラグビー熱が沸き上がった。ラグビーの勃興はサッカーにおける日本人の劣勢と深い関係がある。1923年に南滿工業に赴任した山本芳松はサッカー部をラグビー部に切り換えるが、それはサッカー部が「地元の中国人中学チームと試合しては負けてばかりいて、生徒の士気は衰えるばかりで、彼らの士気を高めるため³⁰」であった。1924年には満鉄、旅順工大、大連商業などほとんどの蹴球部がラグビーに転向したため、1925年には滿洲体育協会も全滿蹴球選手権大会をサッカーからラグビーに切り換えた³¹。

野球とサッカーは日本と中国それぞれの国技に相当するような競技である。上述した野球とサッカーのすれ違いは、日本内地と中国本国のスポーツ状況を反映している。すなわち、滿洲の日本人と中国人は、お互いの関係よりも、母国との関係のほうが深かったことになる。とりわけ滿洲の日本人が、滿洲であれ東三省であれ周囲の中国人の影響をほとんど受けなかったことは、彼らがいかに閉鎖的な空間に閉じこもっていたかを示していよう。野球とサッカーは極端な事例として、他のスポーツはどうだろうか。

1922年ころ、日本人の側にはYMCA、満鉄、南滿工業、大連中学にバスケットボー

が開催したサッカー大会には奉天の8校の学校が参加した（遼寧省地方志編纂委員会辦公室編『遼寧省志 体育志』遼寧科学技術出版社、1996年、67頁）。また大連では外国人船員の影響を受けて1905年以降に中国人もサッカーを始め、1920年には簡易のサッカー場をつくってサッカーをしており、1921年3月10日に大連で最初のサッカーチーム、中華青年隊が組織された（大連市地方志編纂委員会辦公室編『大連市志 体育志』大連出版社、1993年、71頁）。

²⁹ 『満日』1922年12月5日。

³⁰ 高尾恭三「大陸に弾んだ楕円球の青春賛歌」（全滿ラガーマンの集い『全滿ラグビー史・概要：1999』全滿ラガーマンの集い事務局、1999年所収）。

³¹ 滿洲文化協会編『滿蒙年鑑』大正14年版、滿洲文化協会、1924年、766頁；滿洲文化協会編『滿蒙年鑑』大正15年版、630頁。

ルのチームがあった³²。中国人側の状況は判然としないが、1923年11月に日本のYMCAと中国のYMCAが対戦したとき、「民国人の団体は頗る優秀の腕揃ひで大連に於ける欧米及び日本人の一大強敵で斯界に名を成して居る³³」と報じられており、この時点ですでに相当の実力を誇っていたようである。このことは、当時中国がフィリピンと並んで極東のバスケットボール先進国であり、同じ中国でも華北が優勢であったことを考えれば、決して不思議ではない。しかし、その後、中華YMCAのレベルが下がったのか、日本人側のレベルが上がったのか定かではないが、1925年2月に満洲体育協会が主催した全満バスケットボール選手権で中華YMCAは初戦の日本側YMCAに8-36で惨敗している³⁴。この日中YMCA戦を評したある日本人は、やや上から目線で親善に言及している。

中華YMCAが此の大会に参加されたことは体育界から云つても日華親善の方面から言つても誠に喜ばしき快挙であると思ふ、競技には国境もなく、人種もなく又階級もない。吾人スポーツマンは是等の運動競技を通じて日華親善の実をあげて行くべきであると思ふ³⁵。

日本人側が主催する競技会には必ず中国人チームの参加が見られたものの、満洲内においては日本人側が概して優勢を保っていた。もちろん、中国人側の活躍も見られ、1925年秋の全満籠球大会には旅順工大が準優勝し、1927年冬シーズンからは旅順二中が中学校バスケットボール界で健闘した³⁶。バスケットボール界のこうした状況は（日本側から見て）日中親善という点で理想的ではあったが、バスケットボールはマイナースポーツであり、影響力では野球、サッカーにはるかに及ばなかった。このほか、陸上競技、水泳、テニスなどで中国人の参加が多く見られるが、日本人と中国人のレベルの差は大きかった（水泳の史興隆は例外である）。岡部は陸上競技について次のように述べている。

³² 満蒙文化協会編『満蒙年鑑』大正12年版、満蒙文化協会、816頁。

³³ 『満日』1923年11月11日。

³⁴ 『満日』1925年2月16日。

³⁵ 短軀豚生「排球と籃球、選手権大会評（三）」『満日』1925年2月26日。

³⁶ 旅順二中は関東庁体育研究所主催の全満籠球大会の乙組（1927年11月）、南満工専籃球部主催の全満中等学校籃球大会（1928年5月）で優勝している。

国際的な競技会を催そうとすれば、誰しも先づ隣邦中華民国、及び露西亜との間に親善の意味での競技会開催を考へるであらう。然し之はいろ／＼な事情があつて到底実現不可能であらうと私は考へる。何故かと云ふに……今中華民国及び露西亜の陸上競技界の事情を見るに、日本の陸上競技界の発達との間に可なりの隔たりが出来、其ため興味ある国際競技は不可能となつた³⁷。

1926年に関東庁始政二十周年を記念してさまざまな事業が実施されるが、そこには記念運動会の開催、関東庁体育研究所の設立、旅順運動場の建設など、スポーツ関連の事業も含まれていた。このうち運動会は9月25日から27日まで開かれ、陸上競技、水泳、サッカー、ラグビー、テニス、バレーボールの各競技に、小学校、公学堂から社会人までの男女が参加するという大規模なものであった。競技では、小学校と公学堂は区別されたが、中学校以上は日本人と中国人の区別はなされず、従来のスポーツ界に見られた「ア式は中国人、ラ式は日本人」という区分の撤廃を目指した³⁸。こうして、関東都督府設立から20年を経て、日本人と中国人が一体となった関東州が演出されたのである。これは5年前の始政十五周年におこなわれた相撲や、この運動会に先だって開かれた記念武道大会のように、日本人しか参加しないイベントには見られない特徴であった。しかし、台湾や朝鮮と違って、満洲では現地人たる中国人はあくまで中国人であり、日本人ではなかった。それゆえ、同時期の明治神宮大会のように、帝国日本の国民統合を目指すものではなかった³⁹。満洲の中国人は明治神宮大会に出場することはできなかった。その代わり、彼らが目指したのは中国側の華北運動会、全国運動会であった。また極東大会では、満洲の日本人は日本の予選に、満洲の中国人は中国の予選に参加した。このように満洲の中国人スポーツ界は、東三省や中国本国の中国人との関係が深く、日本人スポーツ界は、遠く離れた日本内地との関係が深かった。満洲のスポーツ界は分裂していたのである。

ただし、奉天、長春、ハルビン（満鉄附属地ではない）のように、外国人（日本人と中国人以外）が数百人以上いる国際都市は例外であった。長春では「三国人」の参

³⁷ 『満日』1927年12月7日。

³⁸ 『満日』1926年6月26日、7月7日。

³⁹ 拙著『帝国日本とスポーツ』塙書房、2012年。

加する競技会がしばしば開かれた。たとえば、1925年5月に長春青年会が開催した第1回全長春陸上競技会には中国人とロシア人が多く参加し、関心の高かったマラソンではロシア人が優勝している。同年7月のプール開きにあわせて開かれた水泳大会にも「三国人」が参加、優勝の大部分をロシア人が占めた⁴⁰。また普蘭店のように日本人の少ない地方（1925年に日本人の占める割合は関東州全体で12%だったが普蘭店は0.7%だった）では1920年という早い段階で「日支人合同で野球、庭球、蹴球より成る普蘭店運動倶楽部」が設立され、秋の全普蘭店運動会は「日華人合同」で開催され、東三省側の小学校も参加している⁴¹。しかし、このようなケースは例外に属する。

以下で注目したいのは奉天である。というのも、のちの建国運動会では奉天が大きな役割を果たすからである。奉天は国際都市という以外に、東三省のスポーツの中心であり、かつ州外（満鉄附属地）のスポーツの中心であった。また、奉天の省城と満鉄附属地は近接しており交流は容易だった。さらに、満洲における最初の中国人向け中等教育機関である南満中学堂があった。初代学堂長の飯河道雄が4か月で去ったあと、第2代学堂長に着任したのが内堀維文である。内堀は日中共学論者であり、また中国人には体育を奨励する必要があると考えていた。1919年に奉天中学が設立され、奉天中学校長を兼任した内堀は、「満中（南満中学堂）と奉中（奉天中学）とは絶対に分離対立せしめてはならぬ」と両校を一体として運営しようとした（両校は隣接していた）。さすがにこれは反発を招くが⁴²、1920年に両校が開催した連合運動会は、その後も続けられた。1924年に内堀は旅順二中に移るが、排日運動の高まりを前に、体育と徳育を「生徒たちが排日運動の影響を受けないように」する手段として重視した⁴³。

奉天には日中スポーツ交流の好条件が揃っていたわけだが、実際にはどうだったか。1922年10月に満洲医科大学が開校記念として「全満日華学生のオリムピック大会」を開催、翌年の同大会には奉天省立高級中学附属小学校、奉天省立第一師範学校、奉天

⁴⁰ 『満日』1925年5月22日、7月16日。

⁴¹ 『満日』1920年11月4日、1925年9月29日、1926年10月5、6日。

⁴² 竹中憲一『「満州」における教育の基礎的研究』第2巻、柏書房、2000年、第8章。

⁴³ 竹中憲一『「満州」における教育の基礎的研究』第2巻、279頁。日本でもスポーツが赤化防止、思想善導に役立つと考えられていた。またこのような特性から占領地の文化政策にも利用された（拙稿「戦争・国家・スポーツ」）。

第三高級中学などが参加した⁴⁴。1925年6月に満洲医科大学が主催した第1回全満中等学校庭球大会には奉天第一工科高級学校が参加した⁴⁵。この大会が五・三〇事件の直後であることは興味深い。奉天体育協会は1927年4月下旬に開催するバスケットボールの選手権大会に、東北大学など東三省側の学校を招く予定であったが、実現したかどうかは不明である。同年5月には日支女学校連合の女子学芸大会が開催され、その成功を受けて秋に日華女学生の連合運動大会が予定されたが、実現には至らなかった⁴⁶。奉天の日本人は東三省側とのスポーツ交流を積極的に推進しようとしたが、長春やハルビンに比べると、あまり成功したとはいえない。奉天は東三省政権の所在地で、排日運動が活発だったことが最大の理由であろう。日本人側、中国人側それぞれで十分な数の競技会があったことは、交流を促すどころか、逆に、（とくに中国側にとって）積極的に交流する必要性を低下させた可能性もある。この点は今後の課題としておきたい。

第2章 外向きの時代（1928-1931）

第1節 張学良と日仏競技

満洲と東三省の間の日中スポーツ交流の呼びかけは、張学良側から提起された。1928年8月末、張学良は奉天領事館に、9月22-23日に大連で開催が予定されている日仏対抗競技終了後、「支那学生の運動奨励に資するため」奉天でも同種の競技会を開催したいと申し出た。31日に関東庁は、日仏競技参加選手は大連での試合後すぐに東京へ向かうため希望に副えないと返答している⁴⁷。なぜ張学良は突然、このような申し出をしてきたのだろうか。

この3か月前の6月4日、張学良は関東軍の謀略によって父の張作霖を失った。7月に張は東三省保安委員会委員長・保安総司令となり、東三省の支配者となった。同じころ、北伐を再開した国民革命軍は北京まで迫っていた。張学良は南北妥協、すな

⁴⁴『満日』1922年7月21日、10月9日。

⁴⁵『満日』1925年6月9日。

⁴⁶『満日』1927年3月12日、5月14日、8月26日。

⁴⁷『満日』1928年9月1日。

わち蒋介石との提携を画策した。一方、中国の分裂によって利益を得てきた日本は統一中国の出現に危機感を抱いた。田中義一首相は張作霖の葬儀に林樞助を特命全権大使として派遣し、南北妥協を思いとどまらせようとした。張学良は林との会談で、南北妥協を三か月間見合わせることに同意した。張は林との会談を蒋介石に報告したさい、日本に対する態度として、「強硬、軟化、円滑〔角を立てない〕」があり、強硬は中国の軍事力では難しく、軟化では第二の朝鮮になりかねず、「暫時、円滑の方法で引き延ばし、一面、国際間で手立てを講じることに取り掛かり、その野心を挫く」しかない⁴⁸と述べている。言うまでもなく、先ほどの申し出はこの円滑の手段であった。営口農工商学連合会など、さまざまな中国人団体が張学良に南北妥協を迫るなかで、あえて日本に対して友好的に振る舞い、南北妥協に至るのではないかという日本側の疑念を払拭しようとしたのである⁴⁹。もう一つ重要な点は、日仏中間の競技ではフランス人選手が介在するため、日中両国の直接関係にならないことである。

張学良は若いころ YMCA に出入りし、奉天在住外国人が組織する奉天クラブ^{ムクデン}に所属しテニスをしていた⁵⁰。1923年9月には船津辰一郎在奉天総領事と日本総領事館コートで試合をするとの報道が見える⁵¹。この経験を生かして、張は日本側に断られた直後の9月8日から2日間、自邸コートで国際庭球大会を開催し、自らも参加した。中国、アメリカ、フランスの選手に加え、日本からは満洲医科大学の学生と東洋棉花株式会社の社員が出場した。日本人チームは圧倒的強さで優勝し、張学良寄贈カップを手にした⁵²。ここでもやはり「国際」であることに注意したい。

9月22日から2日間、大連で日仏競技が開催された。『満日』は社説で同競技を次のように評価した。

⁴⁸ 「致蒋介石電」1928年8月9日（周毅等主編『張学良文集』上巻、同澤出版社、1999年、104頁所収）。

⁴⁹ 8月24日の営口農工商学連合会電は日本の外務省文書にも残されており、日本側の関心の高さを物語っている。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B02031862400、支那内乱関係一件／国民軍ノ北伐関係／張学良対南方妥協問題（A-6-1-5-1_2_8_001）（外務省外交史料館）を参照せよ。

⁵⁰ NHK取材班、臼井勝美『張学良の昭和史：最後の証言』角川書店、1991年、22頁。

⁵¹ 『満日』1923年9月1日。ただし、関東大震災のため中止になった可能性が高い。

⁵² 『満日』1928年9月7、11日；張友坤、錢進主編『張学良年譜』上、社会科学文献出版社、303頁。カップが完成して贈られたのは12月であった（『満日』1928年12月21日）。

日支両国民の完全なる親善、世界各個人の共存共栄の上に国際的平和境を建設せんとする我民族の理想が、偶々此のスポーツに依て最も鮮明に表徴され居ることを、我等は中外に誇示せざるを得ない。果然、今回の企ては支那側の人々によつても歓迎され、殊に東三省政団の首脳者たる張学良氏の如き、近時スポーツに傾注して、各国選手を奉天に招待する計画ありと聞くは欣びに堪えない処である。我等は此の機会に於いて、支那側が一日も速に軍閥抗争の内乱を終熄し、内治の整備を図り、進んでスポーツの振興を策し、其の民族精神を涵養すると共に満洲の文化の発展に専念せんことを勧告する⁵³。

満洲とは、戦乱に明け暮れる中国に日本が築いた「平和境」であり、それを表徴するのが国際スポーツであった。一方で、最後の「勧告」という言葉が示唆するように、日本は中国に対して指導者の立場にあると自任しており、対等な親善と言えるものではなかった。

日仏選手の招待を断られた張学良は、なおも満鉄と交渉を続け、ついに一部の日本代表選手が出席することになり⁵⁴、9月29日に張学良の主催で国際選手歓迎運動会が開かれた⁵⁵。運動会終了後、張は日本側監督の岡部平太を私邸に招き、日中間のさらなるスポーツ交流を提案した⁵⁶。日本側はこのような張の態度を肯定的にとらえた。

今回の日本選手招待会の如き、亦「張学良」氏が満蒙に文化の光沢を普ねからしめんとする理想に基くものと解することが出来る、或は之を人気取り策とし、或は日本に対する政略なりとするは余りに僻見であらう……吾等は東三省に於ける日支両国の関係が、最も親善なるべくしてしかも往々これに反する事実の多きに見て、外交官の外交以外国民外交の重要なことを痛感しこれを主張し来つたものであるが、張氏今回の計画は、全くこの国民外交を率先して行ふもので……支那側の政治家も……スポーツマンライクの政治、外交を行ふやうになつて欲しい⁵⁷。

⁵³ 「国際競技の開会を祝福す」『満日』1928年9月22日。

⁵⁴ 『大阪朝日新聞』1928年9月23日。

⁵⁵ 『満日』1929年9月30日。

⁵⁶ 拙稿「戦争・国家・スポーツ」。

⁵⁷ 「張学良氏のスポーツ奨励」『満日』1928年9月29日。

では、なぜ張は国際親善の手段としてスポーツを選んだのか。第一に、張自身がスポーツマンであり、自ら参加できたことがある。第二に、第1章第2節で見たようにスポーツを通じた交流には少ないながらも実績があったからである。そして、第三に、張はスポーツ（と体育）を自らの政治目標を実現する手段と考えていたからである。1928年8月に東北大学校長に就任した張学良は、新年度開始後まもない9月14日に、学生への講話で「私が今日諸君にまずお話ししたいのは体育の提唱である」と語っている⁵⁸。同年10月に馮庸大学で開かれた奉吉黒三省連合学生運動会で会長を務めた張は開会の挨拶で「国家の盛衰は、土地の大きさや財源の豊かさによるのではなく、国民の精神如何にある」と前置きしたうえで、ドイツが第一次世界大戦の敗戦後に速やかに復活できたのは国民の精神によるもので、健全な精神は健全な身体に宿ることから、体育はとりわけ国民が取り組まねばならないものであり、この運動会を開いたのも体育奨励のためであると述べた⁵⁹。ここで張が東三省をドイツに（そして明示されないものの、ドイツを占領した連合国を日本に）なぞらえているのは明らかであろう。体育は国権回復、民族再生の鍵であり、端的に言えば、日本から失地を奪い返す手段であった。こうして張はさまざまな形でスポーツを奨励した。

1929年、張学良は東北大学に巨大な競技場を造り、そこで第14回華北運動会を開催し、自ら会長を務めた。また同年10月には、東京、京城で日独競技に参加した選手を招待して、中日^{ドイツ}国際運動会を開催した。さらに張は、華北運動会に参加した華北体育連合会会長で清華大学副教授兼北平師範大学教授の郝更生を引き抜き、ちょうど設立を進めていた東北大学体育専修科の主任に据えたほか⁶⁰、呉蘊瑞、宋君復、申国権ら著名な体育教授を同大学のスタッフに加えた。彼らはいずれもアメリカ留学の経験者で、申国権（申基俊）は朝鮮人であった。日本に対抗的な張の姿勢が窺えよう。このほか、張は中日^{ドイツ}国際運動会に出場したドイツのリュウヒャー選手をコーチとして東北大学に招聘した。張は東北大学だけでなく、自らが創設した同澤中学や同澤女子中学でも体育を奨励した。奉天には馮庸が創設した馮庸大学があり、やはり熱心にス

⁵⁸ 張友坤、銭進主編『張学良年譜』上、306頁。

⁵⁹ 『盛京時報』1928年10月7日。

⁶⁰ 葉龍彦『郝更生伝』台湾省文献委員会、1993年、25頁。

ポーツに取り組んでいた。東北大学と馮庸大学を主力とする遼寧省チームは、1930年4月に杭州で開催された第4回全国運動会の男子陸上競技に優勝した⁶¹。女子の陸上競技は東省特別行政区（ハルビンを中心とする行政区）が2位に入った。しかし、翌月に東京で開かれた第9回極東大会では、劉長春が怪我で棄権したこともあり、陸上競技中国代表は惨敗に終わった⁶²。陸上競技日本代表の監督を務めた岡部は、得点には現れなかった中国の健闘を称え、「国広く人多き中華の将来は実に興味ある問題であると思ふ」と期待を寄せた⁶³。

⁶¹ 全国運動大会辦事処編『全国運動大会総報告：十九年四月杭州举行』全国運動大会辦事処、1930年、運動成績紀錄、10-11頁。ちなみに遼寧の得点は49点、2位上海は45点、3位広東が16点であった。

⁶² 日本131.5点、フィリピン32.5点、中国1点、インド0点だった。

⁶³ 『東京朝日新聞』1930年6月1日。

第2節 日中スポーツ交流の進展

表 日中スポーツ交流一覧

1928 年		
9 月	国際庭球大会@奉天	庭球
9 月	国際選手歓迎運動会@奉天	陸上
11 月	東北大学（奉天）の大連遠征	籠球、蹴球
1929 年		
1 月	東北大学の日本遠征	籠球、蹴球
5 月	奉天女子師範対奉天高女@奉天	野球
6 月	燕京大学（北平）対奉天満鉄倶楽部@奉天	野球
7 月	芝罘 YMCA の大連遠征	籠球
8 月	東北大学対全長春@長春	陸上
9 月	張学良主催、国際トーナメント@奉天	庭球
9 月	早稲田大学、京城帝大の満洲遠征	蹴球
9 月	同澤女子中学（奉天）の大連遠征	排球
10 月	中日徳国際運動会@奉天	陸上
11 月	大連籃球リーグ戦	籠球
11 月	大連蹴球リーグ戦	蹴球
12 月	馮庸大学（奉天）の大連遠征	籠球、蹴球
12 月	南開大学（天津）の大連遠征	籠球
12 月	南満工専（大連）の奉天遠征	籠球
1930 年		
4 月	馮庸大学、東北大学の来征@大連	籠球
10 月	日支対抗競技@奉天	排球、籠球、庭球、蹴球
10 月	馮庸大学の大連遠征	籠球、蹴球
11 月	同澤女子中学対大連神明高女@奉天	排球
12 月	馮庸大学の日本遠征（実現せず）	籠球、蹴球
1931 年		
1 月	北平師範の大連遠征	籠球
2, 3 月	日支交驩スケート大会@奉天	スケート
5 月	奉天医大対馮庸大学@奉天	陸上
5 月	両江女子体専（上海）の来征@大連	籠球
6 月	奉天国際運動場開き	陸上、野球、排球、蹴球
8 月	東北大学対全長春@長春	陸上
8 月	馮庸大学対奉天中学@奉天	野球
8 月	馮庸大学対全撫順@撫順	陸上
9 月	漢口水害救恤日華対抗籠球蹴球戦@大連	籠球、蹴球

前頁の表は1928-1931年の日中間のおもなスポーツ交流を列挙したもので、交流が最も頻繁だった競技はサッカーとバスケットボールだったことが読み取れる。とりわけ興味深いのは、1929年1月の東北大学による日本遠征である。この遠征は12月29日に張学良が易幟〔国民党への帰順〕に踏み切った直後に敢行されていることから、易幟に対する埋め合わせの意味が込められていたのかもしれない。奉天で東北大学の関係者と打合せをした岡部は次のように語っている。

支那人間の運動熱は非常なもので然かも今まで誤解されて居た日支間の感情をスポーツで理解し合ふと云ふ勢が盛んとなり今回の遠征となつたので、張学良氏も非常に喜んで居るし両部長〔東北大学文科部長と法科部長〕など非常な意気込み方である、自分達は複雑な外交方面は色んな役目の人々に委してスポーツと云ふ様な明るい方面で幾分なりともわだかまつた日支間の感情の融合に尽して見たいと思ふ⁶⁴。

遠征の成績は5勝2敗1引分であった。この遠征に同行した岡部平太は「日支親善のうへに大なる功績を貽した⁶⁵」と評価した。

奉天では1928年から日本人学生と中国人学生の間でサッカーの試合がおこなわれていたが⁶⁶、大連では1920年代前半に日本人の間でサッカー熱が冷めて以来、サッカーの日中対抗戦は見られなかった。この状況を大きく変える契機となったのは、1929年9月の早大蹴球部と京城帝大（大半が朝鮮人のチーム）の来征である。遠征軍に対抗するため、大連では隆華蹴球団と中華青年会の二つの中国人チームが連合して中華足蹴団を結成した。中華足蹴団は早大に0-7、0-4と完敗したが、京城帝大には隆華が2-1、中華青年会が2-2と善戦した。この一連の国際戦の間、満鉄有志の間で日本人サッカーチームの結成が唱えられ、前早大蹴球部主将朝倉保を中心に満鉄チームが誕生した。11月下旬には大連中日蹴球連盟が組織され、満鉄、隆華、中華青年会の第1回リーグ戦が実施された⁶⁷。1929年12月、1930年10月には馮庸大学が大連に遠征した。馮庸大

⁶⁴『満日』1928年12月13日。

⁶⁵『満日』1929年1月29日。

⁶⁶1929年5月12日に奉天体協主催で第二回日支学生ア式蹴球大会が、翌年5月に第三回大会が開催されている。

⁶⁷『満日』1929年11月22、25日。満鉄は隆華、中華青年会にいずれも2-5のスコアで敗れた。

学は1930年4月の全国運動会で準優勝した強チームである。1929年の遠征では日本人チームとの対戦はなかったが、1930年の遠征では全大連を2-0で破っている⁶⁸。さらに1931年6月には馮庸大学と全大連の間で定期戦を実施することが決定し、第1回は同年8月末か9月初に予定されていたが⁶⁹、実現には至らなかった。

より国際的な展開が見られたのはバスケットボールである。とりわけ日本人側では、1925年の満洲体育協会と大連YMCAによる全満選手権大会と全満大会の創設、1928年の南満工専による全満中等学校大会の設立、同年の全満選手権大会男女別開催、1929年の大連籃球リーグ戦実施など、バスケットボールの人気は急速に高まっていた。これには内地の影響もあろう（ただし、満洲事変以前に内地チームと直接交流することはなかった）が、中国の影響も少なくない。たとえば、当時バスケットボールの訳語として「籃球」が多く使われたのは中国の影響だろう⁷⁰。バスケットボールで特徴的なのは南開大学、北平師範など北平・天津地区のチームの遠征である。北平・天津は中国でもバスケットボールが最も強い地区であり、現に両校の選手には極東大会の中国代表選手が複数含まれていた。その実力は圧倒的で、南開大学は大連YMCA、大連二中、大連満俱、南満工専にそれぞれ90-6、57-17、81-13、47-10で勝ち⁷¹、北平師範は満鉄、全大連に57-18、52-20で勝っている⁷²。満洲体育協会は彼らの実力を見込んで招聘したのである。馮庸大学の实力はやや劣り、大連の日本人チームとの対戦でも苦戦している。1930年4月に杭州で開かれた全国運動会に参加した帰りに馮庸大学は大連のチームと試合をしたが、このときには馮庸自身がフォワードで出場している。馮庸大学のサッカーとバスケットボール部員は1930年の冬季休暇に日本への遠征を企てて

⁶⁸ 『満日』1930年10月26日。

⁶⁹ 『盛京時報』1931年6月18日。

⁷⁰ もっとも、「籃球」は関西でも広く使われていた（拙稿「なぜbaseballは棒球と訳されたか：翻訳から見る近代中国スポーツ史」『京都大学文学部紀要』第55号、2016年3月）。満洲には西日本の出身者が多いことを考えると、日本の影響も考えられなくはない。ただ、満洲事変をさかいに「籃球」が使われなくなることを考えると、中国の影響が大きかったと推測できる（サッカーの場合、「蹴球」には日本語に他の有力な訳語がなく、かつ「蹴球」は比較的早くに定着していた）。

⁷¹ 『満日』1929年12月8-10日。

⁷² 『満日』1931年1月10-11日。

いたが、実現しなかったようである⁷³。

野球は、日本人側では1927年からの満洲チームによる都市対抗野球三連覇が象徴するように、まさに絶頂期を迎えていたが、中国人側は依然として低調で、交流の頻度も上がらなかった。馮庸大学と東北大学には野球部があったが、北平、天津と同じく、アメリカの影響を受けていたと考えられる⁷⁴。1931年8月の奉天中学と馮庸大学の野球戦が日本側との初対戦であった⁷⁵。大連では事情がいくぶん異なり、日本人が指導することもあったが、その対戦相手は沙河口工場見習やJTBなど大連の二流以下のチームであり、しかも1931年6月のJTB戦が「大連における日華対抗試合はこれが嚆矢である」と伝えられる（実際はそうではない）ほど、珍しいものであった⁷⁶。

陸上競技では、大連を中心とする満洲の陸上競技界が全盛期に入り、中国側は歯が立たなかったが、地方都市との対抗戦は互角以上の成績を残した。東北大学は全長春と2回対戦し、いずれも勝っている。馮庸大学は全撫順と戦い、24-28で惜敗した。馮庸大学と撫順体育協会は「中日両国青年の衷心よりの親善を図ると共に両国陸上競技の進歩発達を目的とし毎年適時相互の地に於て本大会を開催する」という協定を結んだが⁷⁷、満洲事変後に馮庸大学が北平に移転したため、2回目が開かれることはなかった。鉄嶺では1930年に中国側青年会から日本側青年団に「日支青年接近融和」のため対抗陸上競技の申し出があり、「日支対抗空前の競技」が開催された⁷⁸。1931年8月には第2回大会が挙行されている⁷⁹。1931年秋には全遼寧と全満洲の大学対抗競技の開催が準備されていた。岡部は同大会について「今まで内地のチーム以外に適当な相手を持たなかつた満洲の将来として非常に有意義なことであり又興味ある問題である」と述べており⁸⁰、中国側が対等の相手として認識されるに至ったことがわかる。1930年12

⁷³ 『満日』1930年4月16日、11月27日。

⁷⁴ 東北大学野球部は1930年に創設、コーチは劉中和（経歴不明）であった（『満日』1930年5月19日）。

⁷⁵ 『満日』1931年9月1日；『盛京時報』1931年8月30日。

⁷⁶ 『盛京時報』1931年6月9-10、17日、1931年6月17日。

⁷⁷ 『満日』1931年8月7日。

⁷⁸ 『満日』1930年6月8日。

⁷⁹ 『満日』1931年8月14、25日；『盛京時報』1931年8月25日。

⁸⁰ 『満日』1931年5月12日。

月に満洲体育協会が今後の各種競技会に中華民国選手や在華外国人を招待するという方針を決定したのも、こうした認識を反映していた⁸¹。

1920年代にスポーツは女性（とくに女子学生）の間に急速に広まった。極東大会では1923年から女子競技が採用され、日中対抗戦も実現している。しかしながら、満洲では、中国人女性に対する組織的な中等教育が実施されていなかったこともあり、日本人と中国人の間のスポーツ交流はほとんど見られなかった。そんななか、1929年5月に奉天高女と中国側の奉天省立女子師範学校とのインドアベースボール戦がおこなわれたのは興味深い⁸²。日本側にせよ、中国側にせよ、女子スポーツとして人気があったのは、テニス、バレーボール、バスケットボールだったからである。同年9月には同澤女子中学バレーボールチームが大連に遠征した。同澤側から満鉄体育係に申し込んできたようなので、満鉄体育係主任の岡部が仲介したのだろう。このとき同澤中学も大連一中、大連二中とサッカー、バスケットボールの対戦を申し込んだようだが、こちらは実現しなかった。同澤女子中学は神明高女、弥生高女と対戦し大敗した。とくに前者との対戦は0-21、1-21と一方的なものだった⁸³。1931年5月、上海の両江女子体育専門学校バスケットボールチームが日本遠征の帰途に大連に立ち寄り、弥生高女、神明高女に連勝した⁸⁴。

総合競技会での日中交流として注目すべきなのは、1930年10月の日支対抗競技（中日対抗競技）と1931年6月の奉天国際運動場開きである。前者は1929年10月に張学良から岡部に提案されたもので、全満洲（日本人）と全遼寧（中国人）が初めて対等の形でぶつかり合った。1930年春に岡部と劉風竹（東北大学副校長）が協議し、競技種目として陸上競技、サッカー、テニス、バスケットボールを採用した。これは双方の得意種目を出し合ったもので、岡部はバスケットボールが勝敗の鍵を握ると見ていた⁸⁵。1930年9月に岡部と劉が再度協議し、陸上競技は来春に延期し、代わりに体育ボール（バレーボール）を実施することになった。日本側はテニスと体育ボールに勝つと

⁸¹ 『満日』1930年12月10日。

⁸² 『満日』1929年5月25日。

⁸³ 『満日』1929年3月29日、9月21、23日。

⁸⁴ 『満日』1931年5月26-29日。

⁸⁵ 『満日』1931年4月18日。

予想し、中国側はテニス以外はすべて勝つと予想していた⁸⁶。ところが蓋を開けてみると、初戦のバスケットボールを制した日本が、テニス、体育ボールでも勝利を収め、サッカーも1-1の引き分けに持ち込んだ⁸⁷。日支対抗競技は今後も日本側(大連)と中国側(奉天⁸⁸)で交互に開催される予定だったが、満洲事変の勃発により、第2回大会が開催されることはなかった。

奉天国際運動場も張学良と岡部の会話に淵源する。1928年9月に岡部が初めて張に会ったとき、岡部は大運動場を作るよう提案した⁸⁹。その言葉どおり、翌月下旬には『満日』で張が小河沿運動場の北に15万元を投じて大連運動場に劣らぬ競技場を建設することが報じられた⁹⁰。翌年1月下旬に奉天体育協会副会長の木谷辰巳が「支那側は十五万元を投じ今春の解氷期を待つて小河沿に大グラウンドを建設すること、なつてゐるので対外関係の深い国際都市としても奉天に日本側の大グラウンド設置が是非必要」と語ったように、日本側も中国側に対抗して大規模な競技場を建てる必要に迫られることになった⁹¹。中国側の運動場は結局、北陵の東北大学構内に建設され、1929年5月末に華北運動会が、10月下旬に中日徳国際運動会が開かれることになる⁹²。一方、日本側の競技場は1929年6月に建設が決定、1930年5月に着工し、同年11月に竣工した⁹³。遅延の原因は緊縮財政である。これに対して張学良側が豊富な資金を活用できたことは、奉天の医大スケート部が1929年末にヨーロッパ遠征を企てたさい、関東庁

⁸⁶ 『満日』1930年9月17日；『盛京時報』1930年10月20日。

⁸⁷ 『満日』1930年10月19-20日。

⁸⁸ 奉天省、奉天市は張学良の易幟後に遼寧省、瀋陽市に改称され、満洲事変後にふたたび奉天省、奉天市に改称される。その間、この都市を日本側は奉天、中国側は瀋陽と呼んだが、本稿では奉天に統一する。

⁸⁹ 岡部平太「日本人は勝てないか」(岡部平太『スポーツ・勝負・人間：岡部平太遺稿集』岡部平太遺稿集刊行会、1968年所収)。

⁹⁰ 『満日』1928年10月26日。

⁹¹ 『満日』1929年1月22日。体育館についても同様で、1万人収容できるような体育館が「東北大学でもすでにこの程度のものが出来上つた、国際都市とかスポーツ都市とか称されて居る大連に体育館の一つも持たないなんて余り貧弱だ」と『満日』1930年10月17日は報じている。

⁹² 王振乾、丘琴、姜克夫編『東北大学史稿』東北師範大学出版社、1988年、14頁には、この2つの運動会が別の運動場で開催されたかのような記述が見えるが、誤りであろう。

⁹³ 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会『満鉄附属地経営沿革全史』中巻、龍溪書舎、1977年、759-761頁；『満日』1929年6月7、11、14日。

と満鉄が躊躇するのを尻目に、張学良がいち早く資金援助を快諾したことからも知れよう⁹⁴。国際運動場開きには、「国際」の名にふさわしく、中国人、在満の日本人と外国人に加えて、朝鮮からも日本人選手が参加、種目は陸上競技（男女）、バレーボール（男女）、サッカー、野球であった。

1931年夏、長江中流域で大規模な水害が発生したときにも、これまでに培われたスポーツの親善が生かされた。大連の中華青年会は芝罘から籠球と蹴球のチーム（中国人）を招待し、大連の中国人チームと日本人チームの三つ巴で国際試合を举行し、その収益を水害救恤に充てることになった。大連市役所、満鉄体育係、満洲体育協会、『関東報』、『泰東日報』、『満洲報』の各中国語新聞社、『大連新聞』、『満洲日報』の各日本語新聞社がこれに賛同した⁹⁵。大会は満洲事変勃発直前の9月10日から13日に開かれ、籠球は芝罘の白燕、蹴球は全大連（日本人）が優勝したが、蹴球の益文（芝罘）と隆華（大連）の中国人チーム同士の対戦では、反則に対する注意から隆華が退場するというこの種の試合には相応しくない事件も起きている⁹⁶。同様の企画は日本でも見られ、9月15日には神戸YMCAで早大クラブと神戸中華Vクラブによる水災義捐金募集バスケットボール試合が開かれている⁹⁷。ただし、こうした取り組みはスポーツ界のみならず、他の分野でもおこなわれていたのであり、深尾隆太郎が率いる中華民国水災同情会慰問使の派遣は日本における最大の支援活動の一つであった。9月15日に同慰問使は救援物資とともに神戸港を出発、22日に上海に到着したが、すでに満洲事変勃発後であり、物資の受け取りを拒否される。これに対して、同慰問使の支援団体の一つである日華実業協会は「我が寛容は遂に侮慢を以て酬はる」との声明を発表する⁹⁸。非難の矛先は水害に苦しむ国に戦争をしかけた関東軍、あるいはそれを容認した日本政府に向かってしかるべきだが、もちろんそうはならなかった。親善をめぐる国際主義とナショナリズムの関係については節を改めて論じよう。

⁹⁴ 『満日』 1929年10月27日。

⁹⁵ 『満日』 1931年9月3日。

⁹⁶ 『満日』 1931年9月13、14日。

⁹⁷ 『東京朝日新聞』 1931年9月16日。

⁹⁸ 『東京朝日新聞』 1931年9月15、23-26日。

第3節 運動会と「親善」の言説

1932年春に全滿31か所で建国運動会が開かれるが、開催地は関東州および滿鉄附属地の都市と、吉林やハルビンのような日本側の自治機関が存在する都市に限られていた。日本人がほとんどいない旧東三省側のその他の都市には滿洲国(あるいは関東軍)の權威がまだ浸透していなかったからである(1933年以降は建国運動会の地理的範圍が拡大する)。あるいは、この時点では日中間の民族融和を調査団に見せることが課題だったので、これらの都市は除外されたのかもしれない。いずれにせよ、建国後もないこの時期に全滿各都市で運動会を開催できたのは、それ以前からこれらの都市で春秋のいずれかに全市的運動会が開催されていたことが主たる要因として挙げられる。たとえば旅順では春の市民運動会と建国運動会が合同で開催されている⁹⁹。これら運動会の詳細については別稿に委ねることにし、ここではその概略のみ説明しておきたい。前章で触れたように、1910年代初頭以降、「滿鉄運動会」が滿鉄運動会を開催するという構図は、大連だけでなく、他の都市でも見られるようになっていく。1920年代になると、各都市では滿鉄運動会を非滿鉄関係者(市中)にも開放し、市民運動会という名のもとに開催する動きが広がっていった。多くの場合、滿鉄と市中が合同で体育協会を組織し、体育協会が市民運動会の開催母胎となった。このほか、市民協会や青年団が運動会を開催する都市も、少数ながら存在した。これらの運動会は基本的に日本人のお祭りであり¹⁰⁰、都市によっては、中国人、朝鮮人の運動会が別に開かれもした。一方、東三省の側では、基本的に学校を単位とした運動会が主体で、単一もしくは複数の県の学校が合同で運動会を開催することもあった。

滿洲の日本人側の運動会には、1910年代から、少なからぬ中国人が観客や来賓として参加していた。なかには中国人が競技に参加することもあったが、前章で見たマラソンのように日本人と中国人が対抗するという場面は少なく、児童生徒が遊戯や表演などの種目に参加することがほとんどだった。関東州、滿鉄附属地側の都市の人口規模・民族構成や東三省側都市との関係はさまざまで、運動会の様態もさまざまであった。

⁹⁹ 『満日』1931年4月20日。

¹⁰⁰ 滿鉄に雇用される中国人が滿鉄運動会に参加するケースもあった。

1930 年になっても、鉄嶺では中国人を多数参加させたが¹⁰¹、開原では中国人が会場に入ることすら認めなかった¹⁰²。

総じて言えば、運動会の場合、スポーツの競技会ほど日中間の交流は盛んではなかった。それは運動会が主として内向き、すなわち社会集団内の団結に作用したからである。日本側では当初は満鉄の、のちに日本人の共同体のお祭りとして機能した。これに対して、概して学校を単位として開催された東三省側では、とりわけ連合運動会の場合、排日の性格を帯びることが少なからずあった。運動会は中国人の間に強固な民族意識、あるいは共同体意識を呼び起こす媒体であった。ましてや運動会シーズンの 5 月、二十一か条要求受諾、済南事件、五・三〇事件など国恥にまつわる記念日が続き、排日意識がいやおうなく高まる季節である。

日本側が中国側の運動会に神経を尖らせていた事例をいくつか挙げよう。1929 年 5 月、開原城内で中国側の学校による連合運動会が開催された。プログラムには国民党歌、済南事件国恥歌、排外体操などが含まれ、日本側は警戒していたが、『満日』は「排外的の気分は何等見受けなかった」と報じている¹⁰³。同じく 5 月に奉天で華北運動会が開かれたが、「東北大学内に国貨提唱の目的を以て設立された消費合作社は……露店を出して雑貨の販売をなし国貨観念を普及せしめて」いたという¹⁰⁴。前年 10 月に馮庸大学で開かれた奉吉黒三省連合学生運動会にさいして、その開催前から『満日』は「馮庸大学社会科学研究的秘密団体が各方面の同系団体と連絡をとり本大会を利用し排日及び主義宣伝を図らんとする形跡」があると報じていた¹⁰⁵。実際、会場には「躯体強健能徹底的禦侮」「血氣未泯之青年、応率呼還我河山」のような「排外的標語」が掲げられていた。さらに、本来、10 月 6 日から 10 月 9 日まで開催される予定だった同運動会が、雨のため 10 月 11 日までずれこみ、民族意識の昂揚する 10 日の国慶記念日が会期に含まれることになった。関東庁警務局長の報告では、「十日ハ国慶紀念日ニ相当スル処ヨ

¹⁰¹『満日』1930 年 9 月 2 日。

¹⁰²『満日』1930 年 5 月 25 日。

¹⁰³『満日』1929 年 5 月 12、19 日。五・三〇事件直後に開原では同盟休校の動きがあったが官憲に封じられた。そのなかで基督教女学校生徒は「五月三十号国恥」と記した腕章を巻いて活動していたという（満日 1925 年 6 月 20 日）。

¹⁰⁴『満日』1929 年 6 月 2 日。

¹⁰⁵『満日』1928 年 10 月 5 日。

リ万一ヲ慮リ総司令張学良ヨリ学生ノ盲動禁止ヲ訓令スル等支那当局ニ於テ相当取締ヲ為シタル為メ……会開中別ニ排日的言動ヲ認メス」とあり、張が日本側に配慮したことがわかる¹⁰⁶。張のこうした姿勢はスポーツに限らない。11月10日、各地で学生たちが吉長鉄道の延長を求めてきた日本に抗議し、軍警との衝突を引き起こしたことに對して、張はそれが愛国熱誠に基づく行為であることを理解しつつも、かえって外交の足を引っ張りかねないとして自重を求めている¹⁰⁷。こうして張は内向きには運動会を通じて民族の力量を高め、団結を強めつつ、外向きにはスポーツの交流を通じて親善を謳ったのである。親善は日本との共存のためではなく、「円滑」、すなわち最終的に日本を排除するための時間稼ぎの手段であった。

一方、日本にとって親善は排日を抑圧するための手段であった。張学良政権のもと、東三省では民族意識、排日感情が高まり、旅順大連の返還要求さえ湧き起こっていた。在満日本人は自分たちの存在そのものが脅威にさらされていると感じていたのである。親善とはお互いの存在を認め合うことである。日本人側にとって、自分たちを満洲から排除しようとする東三省側との親善は、日本が支配する満洲の現実を承認し、固定する役割を果たすものであった。これこそスポーツの外向きの作用である。あるいは、中国側の「親善」が優勝劣敗、弱肉強食に示されるような社会ダーウィニズム的、垂直的なものであったとすれば、日本側の「親善」は国際主義的、水平的なものと言うこともできよう。よりスポーツに引きつけられ、前者を勝利至上主義、後者をフェアプレイの精神と呼んでいいかもしれない。1931年6月の国際運動場開きにさいして、中国語新聞『盛京時報』は傲霜庵という著者の次のような文章を掲載している。

中国の君子と「射御」の関係は、イギリスの紳士と「Fair Play」の関係と、つまるところ同じである。……今日なお運動家と運動選手が愛されるのは、彼らがみな純真で、率直で、闊達な「世界人」「国際人」だからである。……国家と国家は戦争のために感情が疎遠になるが、選手と選手は運動のために互いに親しくなる。これまた運動家が特別の性格を養成する一因である¹⁰⁸。

¹⁰⁶ JACAR: Ref.B04012461800、体育並運動競技関係雜件 第一卷 (I-1-12-0-2_001) (外務省外交史料館)。

¹⁰⁷ 張友坤、錢進主編『張学良年譜』上、320頁。

¹⁰⁸ 傲霜庵「国際運動場開場紀念」『盛京時報』1931年6月14日。

国際運動場の完成を祝福するのにふさわしい言葉に見える。しかし、『盛京時報』が日本人経営の新聞であり、文章の著者傲霜庵もじつは菊池貞二という日本人であることを考えると、とても額面通りに受け取るわけにはいかない。そもそも、国際運動場そのものが東三省側に対抗して日本側が建設したものである。「国際」とは、東三省側に日本人が支配する満洲の存在をいやおうなく認めさせる言辞であった。したがって、少なくともこの時期の満洲の日本人にとって、国際主義と国家主義は矛盾するものではなかったのである。

第3章 「親善」の破綻（1931-1932）

第1節 岡部平太の逮捕

ところで、東三省側と満洲側は互いの意図を知らずに親善を推進していたのだろうか。答えはおそらく否である。それぞれ相手の意図を知りつつ、あえてそれに触れないことで、親善を取り繕っていたと思われる。たとえば東北大学副校長の劉風竹は中日徳国際運動会の終了後、日本のメディアに対して「支那はたゞコーチを受けるといふ目的であつた。自分達は政治的には何等関係なく真のスポーツマンとして国際親善を図りたいと思ふ。支那はこの競技会を好機会として今後度々かくの如き大会を開き自信ある競技を行ひ人類の平和に努めたいと思ふ」と語っている¹⁰⁹。言うまでもなく、これはリップサービスであり、彼の本心ではない。一方、満洲の日本人については、奉天体育協会関係者が満洲事変後に執筆した次の文章を参照されたい。

此の前後満洲の時局は非常に緊迫を告げ、一触即発の危機と云ふべき時機であつた。張学良軍閥は、排日の旗幟を愈々鮮明にして日本人の迫害されるもの日に次ぎ、在住邦人一人として不安を感じないものはなかつた時である。此の間たゞスポーツ関係のみは、流石に時流を超越して、日支融和の実を挙げて居たが、時には張学良主催の競技会に、日本選手を満載した自動車が登場して堂々日章旗を掲げて、危険区域たる城内を突破するなどの冒険を敢てしたことさへあつた。国際運動場建設に先立つこと一年、昭和四年に独逸陸上選手を迎ふるため、張学良は北陵に三〇万

¹⁰⁹『満日』1929年10月21日。

円を投じて、大競技場を建設した。而して支那の青年をスポーツによつて指導し、其の体位向上と精神作興とを計つたのである。其の真意那邊にあつたかは別に問ふところなく、一に斯道の興隆を慶してこれが指導、鞭撻に、日本の運動団体が力を致したことを今から考へると感慨無量なるものがある¹¹⁰。

もちろんこれは事後の視点ではあるが、張学良の排日の態度はすでに満洲事変以前から日本人の間で危機感をもって語られていたことである。にもかかわらず、「其の真意那邊にあつたか」をあえて問わず、スポーツの興隆に尽くしたのである。

満洲側で東三省側との親善を最も積極的に推進した人物岡部平太は、知人に対して「こんなに支那人の中に深入りしていると、いつか俺は殺されるだろう」と漏らしていた¹¹¹。それでもなお彼が深入りを続けたのは、「自分の考へではあの排日の盛んな時より一つ支那側の大学にでも吾々日本人の持つ真精神を徹底指すことが出来たら自分の力としてはそれで十分だ」と思ったからであった¹¹²。すなわち、自称「国家主義者」の岡部にとって、スポーツの国際主義こそ排日運動を抑制する手立てだったのである。しかし、岡部はたしかに深入りしすぎた。馮庸の魅力に見せられた岡部は、馮庸大学講師となってたびたび陸上競技のコーチをただけでなく、水害で経営難に陥った馮庸大学の借金の工面まで手助けしていた。満洲事変勃発後、岡部は馮庸との「友情忍び難く」、軟禁された馮庸の釈放に奔走した。釈放後しばらく自宅にかくまったが、馮が欧米視察をしたいと言い出したので、馮庸大学の資産を整理するなどして資金を捻出し¹¹³、馮を送り出したところ、馮は「変心」して抗日運動に身を投じてしまった。このため、馮庸の逃亡を手助けした廉で岡部は関東軍に逮捕された。この問題の詳細については別途論じるとして、ここで注意しておきたいのは、「自分が馮をあまり過信した不明の罪でその重大な過失の責任に対しては自分は弁護の余地もない¹¹⁴」と岡部が反省していることである。前述の通り、在満日本人は国際主義＝国家主義の立場からスポーツの親善を推進してきた。しかし満洲事変により、このような親善は破綻を余儀

¹¹⁰ 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会『満鉄附属地経営沿革全史』中巻、761頁。

¹¹¹ 宮畑虎彦「岡部さん——その片鱗」（岡部平太『スポーツ・勝負・人間』所収）。

¹¹² 『満日』1932年1月12日。

¹¹³ その一例がグライダーの満鉄への売却であった（『満日』1931年10月24日）。

¹¹⁴ 『満日』1932年1月12日。

なくされる。岡部の過ちは、その変化を読み切れなかったことにある。あるいはその変化に気づきながらも、「友情」を捨てきれなかったのかもしれない。一方、馮はたとえ純粋な「友情」が存在したとしても、日本人との親善が排日のための手段であることをたえず意識していた。その意味で、馮の立場は一貫していたといえる。

1920年代の岡部が純粋スポーツを推進したのは、それが日本の国益に適うからであった。この時代を特徴づける国際秩序（ワシントン条約や国際連盟はその象徴であった）は、基本的に平等主義的、国際主義的な性格を持っていた。日本は（不満を持ちつつも）この国際秩序の受益者であり、それを維持しようとした。したがって、岡部の国際主義は愛国の一表現であった。しかし、満洲事変後にこの国際秩序は国益に反するものとなった。あれほどオリンピックや極東大会の理想を支持していた岡部がこの両者を排撃したのは、岡部が変わったからではなく、日本を取り巻く環境のほうが変わったからである。この時期の岡部の国家主義もまた愛国の一表現だったのだ。その意味で、自称「国家主義者」の岡部平太と、「無類の国粋主義者」である満洲体育協会主事の林田学が、揃って宣撫工作に従事することになるのは示唆的である¹¹⁵。

第2節 建国運動会の開催へ

意外なことに、満洲事変勃発直後の満洲スポーツ界では、いくつかの大会が中止されたものの、前年に比べて活動が著しく低下したわけではなかった。内地や国際スポーツ界との交流も続けられた。たとえば、10月19日には満洲体育協会から明治神宮大会に派遣される役員選手が東京へ向かい、10月27日には松山高商剣道部が朝鮮経由で来満、レイクブラシッドで開催の冬季オリンピック大会に出場するスケート競技の3選手が12月16日に安東を出発している¹¹⁶。

これに対して、中国への態度はまるで違っていた。満洲スポーツ界は中国との交流を停止したばかりか、率先して中国との戦争を支援した。1931年12月、戦争に携わる軍人、警察、満鉄社員の慰問のため、大連を中心とする諸スポーツ団体が「大連体

¹¹⁵ 拙稿「戦争・国家・スポーツ」；『満日』1931年8月3日；「第三回宣撫班感謝激励座談会」『宗教公論』8巻1号、1939年1月。

¹¹⁶ 『満日』1931年10月20、28日、12月11日。

育団体連盟」を組織した¹¹⁷。

満洲に於ける吾等体育団体は、厳正なる運動精神の見地より、外世界各国の体育団体に対し満洲事変に関する声明書を発して満洲に対する正当なる認識と事変の公正なる理解を求め、内母国体育団体の蹶起協力を誘導して極東平和確保の為に寒風酷烈なる満蒙の曠野に祖国の生命線を死守して暴戾極まるなき兵匪の排撃に奮闘しつゝある我帝国陸海軍軍人、警察官々吏並びに各地警備団体其他に対して満腔の謝意を表し、且つ適切な慰問をなさむが為に、茲に満洲体育団体連盟を結成して其目的達成に邁進せん事を期す。右決議す¹¹⁸。

一見、これまで親善を推進してきた人々の言葉であるとは信じがたいが、親善が国家主義に寄与する目的でなされてきたことを思えば、決して不思議ではない。同連盟は年末にラグビー試合、卓球大会、武道大会などを開催して、その収益金を軍、警察、満鉄に寄附した¹¹⁹。関東軍が錦州を占領し、張学良軍を関内に駆逐するに至って、満洲の中国人にも目配りをする余裕が出てくる。大連体育団体連盟の推進者、林田学は「競技界への希望」と題する文章でこのように述べている。

満洲事変の勃発に依つて……従来一步一步築き上げつゝあつた競技を中心とする日支青年の親善関係も一朝にして崩壊し頓挫して仕舞つた。頑迷暗愚なる支那の為政者に誤られたる支那青年は遠からずして其の誤りを覚り、吾人と共に昔の語らひを為すの日の一日も早からん事を翹望して止まぬ。……満洲運動競技界の対象は単に在満支那人ではない。吾人の望む処は在満青年は日本の斯界をリードし世界を相手として活躍するに在る……在満日支青年の提携は其の第一歩的の眼目である¹²⁰。

ここに、ふたたび「日支青年の提携」が重要課題として浮上することになる。もちろん、これはかつての国際主義的な親善ではない。「支那青年」はいまや「国内」問題となっていた。一方で、満洲国が五族協和を建国理念に掲げたことで、「日支青年の提携」は満洲国の正当性の根拠となり、スポーツはリットン調査団をはじめとする国際社会に

¹¹⁷『満日』1931年12月6日。

¹¹⁸『満日』1931年11月29日。

¹¹⁹『満日』1931年12月12、15、18、25日。

¹²⁰『満日』1932年1月9日。

対する「外向き」の機能を期待されることになる。

満洲国が建国された時点に立って考えれば、リットン調査団対策として建国運動会を開催するというアイデアはけっして突飛なものではなく、必然的だったとさえ言い得る。第一に、スポーツほど日中親善の実績を挙げてきた分野はなかったからである。リットン調査団来満（4月上旬）までわずかな時間しかなかったことを考慮すれば、このことは重要である。スポーツは短い準備期間でも「民族融和」演出の目的を十分に果たすと判断されたであろう。第二に、例年4月から5月にかけて全満各地で運動会が開催されていたことが挙げられる。リットン調査団対策は、その意図を知られないようにして進められねばならなかった。宣伝用だということが露見すればかえって逆効果となるからである。その点、年中行事である運動会を利用すれば、自発的なものと見せかけることができるかと踏んだのではないだろうか。各地の建国運動会のうち2日間にわたって実施されたのは、奉天、長春、ハルビン、大連であり、分配された経費が多かったのは、奉天（4,500円）、長春（3,500円）、吉林（1,500円）、ハルビン（1,000円）であった¹²¹。奉天、長春、ハルビンはとりわけ重視されたことになるが、前述したように、これらはいずれも早くから国際的な運動会開催の実績を有する都市であった。さらに、運動会はスポーツの親善試合と比べて、多数の人（観客ではなく）を動員し、融和を強調できる点で優れていた。実際、建国運動会では「マスゲーム」（体操ダンス）に「運動競技（例へハ演技、武技、陸上競技、蹴球、機械体操、其他仮装行列等）」を実施することが想定されたが、「児童ヲ国際的ニ競争セシムル如キ運動・種目ヲ避クルコト」という配慮が要求されていた¹²²。

建国運動会を組織したのは、関東軍参謀部宣伝課、関東庁学務課、満鉄学務課、資政局弘法処、国務院文教部の代表者と体育の専門家だが、実務に当たったのは学校関係者と体育関係者である。下記は中央準備委員のリストである¹²³。

関東庁学務課主事

山本寿喜太

満鉄学務課体育主任

沖弥作

¹²¹ 金誠「リットン調査団と満洲国建国記念連合大運動会」。

¹²² 「JACAR: Ref.C01002996200、昭和9年「陸滿密綴 第10号」自昭和9年6月7日至昭和9年6月8日（防衛省防衛研究所）；金「リットン調査団と満洲国建国記念連合大運動会」。

¹²³ JACAR: Ref.C01002996200をもとに作成。

同体育掛	渡辺明治
満洲国文教司	川尻伊九
同	武田（守人？）
奉天市政公所	後藤英男
奉天省教育庁兼奉天公学堂堂長	<u>坪川与吉</u>
奉天事務所公所涉外係長兼庶務係長	押川一郎
同地方課庶務係長	下田一夫
同社会主事	<u>河村牧夫</u>
満洲医科大学教授	中西栄八
満洲教育専門学校教授	斎藤兼吉
奉天中学校校長	名和長正
奉天女学校校長	八木寿治
同教諭	永田勝恵
奉天〔南満〕中学堂堂長	<u>安藤基平</u>
奉天春日小学校校長	<u>前田彦祐</u>
奉天普通学校校長	家入佐三

このうち活動の中心となったのは常任幹事（下線）であり、安藤が幹事長を務めた。幹事はいずれも奉天在住者だが、当時関東軍が奉天にあり同地が政治軍事の中心地だったこと、これまで日中親善を最も意欲的に推進してきた人材が奉天に数多くいたこと、がその理由として考えられる。高等教育機関（満洲医科大学、満洲教育専門学校）ではなく、初等中等教育機関の関係者が幹事となったのは、建国運動会の中国人側参加者として初等中等教育機関の学生生徒を想定していたからであろう¹²⁴。中国人教育機関である南満中学堂の安藤が幹事長になったのは、中国人の動員が鍵だったことを物語る。

安藤は1883年生まれで、1905年に東京高等師範学校を卒業、高師時代はテニスの

¹²⁴ 学年が上がると、対象人数が減る（大量動員できなくなる）だけでなく、排日思想の持ち主である可能性も高まった。

選手だった¹²⁵。当時高師の大将として活躍していたのが「庭球界の巨人で、高師の学生の崇拜的であり、他校選手のあこがれの対象¹²⁶」だった飯河道雄である。そして安藤、飯河を励まして高師の東都制覇を支えたのが舎監の内堀維文である¹²⁷。1917年、南満中学堂初代堂長になった飯河は安藤に次のような手紙を送った。

我々が母校でテニスをやり乍ら、内堀先生を校長として私立学校を作り、思ふ存分の理想的教育を行つたら、さぞ愉快であらうと夢物語見たやうなことを語り合つて居たが、今日どうやらそれが実現出来さうになつて来た。……どうだ一つ内堀先生を推立て、将来日提携の楔となる支那の大人物をお互の手で養成しようではないか¹²⁸。

こうして、1917年8月に内堀と安藤が相次いで渡満し、内堀が南満中学堂第二代堂長に、安藤が同教諭となった。内堀は母校東京高師から四角誠一ら庭球選手を呼び寄せ、奉天の軟式庭球黄金時代を築いた¹²⁹。1920年3月に奉天高女が創設されると、安藤はその初代校長となり、1930年4月には南満中学堂堂長に就任した。以下、安藤の教育思想を紹介しよう。

張作霖爆殺事件が起こった1928年6月、安藤は「中国人教育と対支政策」で、中国人に君が代を唱わせたり、神社に参拝させるような教育が中国人の自尊心を傷つけ、反感を増長させたとかつての中国人教育を批判し、中国人に日本を理解させるという中国人教育の現状を是認したうえで、「最も力を用ふべきは中等教育である。中学校時代に於て日本に信頼すべき強き信念を養成したならば、如何に周囲は排日の火の手があがるとも、決して彼等はそれに感染せぬであらう」と述べる¹³⁰。つまり、教育とは排日抑制の手段であり、満洲支配の道具であった。しかし、安藤は唯我独尊的な帝国主義者ではない。現在、中国人の間に日本人排斥の思想が漲り、旅順や大連、そして満鉄の返還を望んでいるが、日本人の側にも問題がある。「在満邦人が関東州や附属地の

¹²⁵ 安藤は京都市立高女教諭だった1914年に『東京高等師範学校庭球沿革史』を刊行している。

¹²⁶ 福田雅之助『改定新版庭球百年』時事通信社、1976年、8頁。

¹²⁷ 桜井寅之助「回顧」（法本義弘編『内堀維文遺稿並伝』内堀維文遺稿並伝刊行会、1935年所収）。

¹²⁸ 安藤基平「余と内堀先生」（法本義弘編『内堀維文遺稿並伝』所収）。

¹²⁹ 安藤基平「余と内堀先生」。

¹³⁰ 安藤基平「中国人教育と対支政策」（安藤基平『満洲事変前と事変後』奉天印刷所、1933年所収）。

温室の中に閉ぢこもつて、務めて支那といふ外氣に触れることを敢てしなかった」として、各自が「忠実に中国及び中国人の研究をなし、彼我の一致点を発見し、互に提携の道を講すべき」だと説く¹³¹。中国（人）研究を排日対策の根本策とするなら、「彼等の日本に対する誤解を解くと共に、なるべく誤解を招き或は嫌惡の情を起させるやうなことを避く」のは応急策である。

日本の教育は決して侵略的帝国主義的のものでない、東洋の平和、ひいては世界の平和を目標とするものであるといふことを機会ある毎に彼等に知らしめる。中国人教育に於ても決して非国民的売国奴的の人物を養成するものでなくして、中国人として将来堅実なる中国の社会国家の建設に貢献すべき人物を養成するものであることを覚らしめる、又日本の青年は中国の青年を排斥輕蔑するものでなくして、同文同種の友誼を厚くせんことを念とするものであることを、各種の競技会や連歡会など接触する機会を多く作りて、不言不語の裡に事実によりて之を認めしめるやうに努めるのである。……目先の見えすいた日支親善論は最早今日には通用せぬ。今日は一部の政治家や実業家だけではいかぬ。国民全体少くとも満洲に居る邦人全部が、各その向々に於て中国人との接触を計り、その方面より日本に対する誤解を解き、感情の融和に努めなければならぬ。此の意味に於て学生の連歡は最も有意義であると信ずる¹³²。

ここに見られる国際主義（東洋の平和、世界の平和）が中国側にとってまさに満洲における日本の存在を肯定するものにほかならないことはこれまで述べてきた通りである。しかし安藤は、学生の連歡会や競技会が日本人と中国人を結びつけ、それによって「見えすいた日支親善」ではない真の国際主義が実現できると考えていた。スポーツを通じて「日本人の持つ真精神を徹底」させようとした岡部とまったく同じ見解だといってよい（安藤は高師で岡部の先輩に当たる）。

安藤が南満中学堂堂長となったころ、学校内では排日意識が高まっていた。安藤は「不良生徒に対して断然たる処分」をなす一方で、

¹³¹ 安藤基平「中国人に対する日本人の態度」（1931年1月）（安藤基平『満洲事変前と事変後』所収）。

¹³² 安藤基平「日支関係と日本人の心得」（1931年2月）（安藤基平『満洲事変前と事変後』所収）。

気分を和ぐる為に運動を奨励し、殊に日支の空気を緩和する為に城内の小中学校の選手を招致して運動会を開催した。之は意外に成功して当時は日支人間の交渉は一切杜絶して城内から附属地へは買物にすら来る者のない時に、数千人の支那人が運動会見物の為に中学堂に押しかけて来たのは寧ろ意外であつた。之は恐らく日本側から支那側の選手を招待して行つた最初の競技会であつたらうと思ふ。時に昭和五年九月であつた¹³³。

安藤がこの経験を踏まえて建国運動会を組織したのは間違いないだろう。建国運動会は4月26日の撫順を皮切りに、5月28日の大連まで各地で開催されるが、安藤自身はこのときすでに別のプロジェクトに関わっていた。満鉄経済調査会による満洲国教育方策の策定である。このプロジェクトには内堀維文と飯河道雄も参加していた¹³⁴。彼らが制定した満洲国の教育宗旨は「建国の理想に基き王道の大義に則り、体を練り、智を研ぎ、徳性を涵養し、以て国民の品格を造就し、之を内にしては民族の共和を図りて、国運の隆昌に資し、之を外にしては人文の発展を賛けて世界の大同に参するに在り」と謳う¹³⁵。王道、民族協和、大同などの理念は満洲国の教育とスポーツを大きく規定することになるだろう。

おわりに

スポーツにはたしかに平等主義的、国際主義的な側面が認められるものの、それは特定の歴史状況において初めて日中親善の主たる媒体となったというのが本稿の結論である。この特定の歴史状況とは、1928年から1931年の間、日本が支配する現状を固定化し、正当化するために排日運動を抑制しなければならなかった満洲側と、現状を否定し、変革するためにそれを可能とする実力を養成する時間が必要であった東三

¹³³ 安藤基平「満人教育者として」（荒川隆三編『満鉄教育回顧三十年』満鉄地方部学務課、1937年所収）。

¹³⁴ 主任の辻正雄は安東大和尋常小学校訓導、他の班員は馬冠標（前哈爾賓第二中学校長）、上原種豊（新京室町尋常高等小学校長）である。調査委員会は5月から8月まで開かれ、満洲国教育に関わる重要な方案を作成した（南満洲鉄道株式会社『満洲国教育方策』南満洲鉄道経済調査会、1935年）。

¹³⁵ 南満洲鉄道株式会社『満洲国教育方策』5頁。

省側が、ともに「親善」を必要としていたという状況であった。それまで日中双方の側で発展していたスポーツは、このとき「親善」の格好の媒体となった。しかし、実際には両者の「親善」はすれ違っていたのであり、「親善」は根本的対立を覆い隠すものでしかなかった。それが露呈したのが満洲事変であり、スポーツは瞬く間に戦争支援の道具となった。満洲国建国後、スポーツは民族融和、五族協和の媒体として利用される。スポーツの平等主義的性格はこうした目的に適合的であったが、それによって日本人と他の民族の間の差別構造、垂直関係が隠蔽されたことに留意する必要がある。その後、日本軍がさらに拡大を続けるなかで、スポーツは宣撫の役割を担うようになり、また一方で、その勢力圏（東亜新秩序、大東亜共栄圏）の団結を高める役割を果たすようにもなるのである。

【附記】本稿はサントリー文化財団人文科学・社会科学に関する学際的グループ研究助成（研究課題名「満洲の体育・スポーツに関する学際的研究：基礎的資料の作成と総合的実証」（研究代表者：高嶋航）2016-2017 年度）を受けておこなった研究成果の一部である。